東北教区報　2024年２月号

あけぼの

発行所
日本聖公会 東北教区
仙台市青葉区国分町2-13-15
TEL 022-223-2349
FAX 022-223-2387
URL https://nskk-tohoku.com/

新年メッセージ
ガリラヤの地

主教 フランシス 長谷川　清純

新年明けましておめでとうございます。先月号にクリスマスメッセージが載りましたから、一ヵ月遅れですが今号で新年の御挨拶を申し上げます。

しかしながら、元日夕刻に能登半島地震が発生、２日夕方には羽田空港航空機衝突炎上事故が続き、心痛む、重たい気分の新年となりました。特に能登半島では強い余震が頻発し、日を追うごとに被害の大きさ、深刻さが報道されています。

それにしても、当初情報量が少なく被害の実態や救援活動の状況が分かりませんでしたから、本当に心細くいたたまれない思いでした。情報が無いというのは人々を不安にさせます。

２０１１年の東日本大震災後被災者支援の先頭に立たれた加藤博道主教は、ある日のメッセージで私たちに「想像力」を要求しました。すなわち、被災地でない地域・遠くにいる人たちは普段どおり生活している訳だけれども、今、被災地にいる・避難所にいる人たちはとっても寒いだろう、腹を空かせているだろう、淋しいだろう、泣いているだろう、痛んでいるだろう、と想像してください、と私たちを諭しました。

被災された知らない人たちのことを想うのは難しいことです。しかし身近に関係する要因があれば、想うことが少し可能になります。あの土地に行ったことがあるとか、そこはあんな風景だったとか、友人があそこにいるとかです。

震災後やや時間が経過して、一般の人たちが全国から、海外から被災地に来られ、ボランティアをしました。その人たちは、自分の目で見、肌で感じ取ったので、想像しなくても被災された人たちに想いを寄せられました。その時から彼ら彼女らは、被災された方々の隣人になりました。

マーガレット・パワーズさんの「あしあとFootprints」という詩で、「私の人生でいちばんつらく、悲しい時」砂の上に残されていたあしあとが一つしかなかった、何故と問うと「主は、ささやかれた。『わたしの大切な子よ。わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に、あしあとがひとつだったとき、わたしはあなたを背負って歩いていた。』」と謳います。

人生苦難に喘いでいる最中に、イエス様がその人をおんぶしておられる、という最高に有難い真実が、殊更に大きなお恵みが、とてつもなく深い慈愛が告白されています。

２０１１年、私は震災後一カ月ほど現地を駆け巡って、ご復活の主イエスが言われた「あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」、「恐れることはない。きょうだいたちにガリラヤへ行くように」とのお言葉を正に聞かせていただきました。

それ故、私たちと常にご一緒におられる主に、私たちが神から遣わされているここ東北というガリラヤでお目にかかれるというものです。私たちと共におられて、苦難の時に背負って歩いてくださり、歩んでくださる主を見つめましょう。今、私たち信仰者は、能登半島地震の被災地にいる皆さまや、ガザの人たちや世界中で被害を受けている人たちの状況・心境を想像してお祈りで繋がりましょう。想像力をもって粘り強く、辛抱強く祈り続けましょう。

（写真は岩木山）（教区主教）

2023年 日本聖公会宣教協議会

「いのち、尊厳限りないもの ～となりびととなるために～」

@山梨県清里・清泉寮　参加者報告

山梨県清里・清泉寮で開催された「２０２３年日本聖公会宣教協議会」に全国より１３０余名が集い、東北教区からは長谷川清純主教、浅原和裕氏（福島）、影山敬信氏（フランシス）、曽根勇司氏（盛岡）、中村久美子氏（大館）、八木正言司祭、若生伸子氏（仙台基督）、渡部拓司祭、赤坂有司氏（管区常議員）、赤坂聖矢氏（実行委員）、越山哲也司祭（実行委員）の11名が参加しました。２０１２年開催以降の実りを持ち寄るとともに、日本聖公会の宣教の中で今大切にしなければならないことを確認しました。

～1日目～

２０２３年日本聖公会宣教協議会は『実り持ち寄りブース』の紹介で始まりました。前回宣教協議会からの10年間の宣教・牧会における取り組みを〝実り〟として紹介し合うプログラムで、11の教区、管区諸委員会や関連施設等計23のブースが会場に並びました。

東北教区は、２０１９年に定めた「東北教区宣教方針（ミッション・ステートメント）」を中心に据え、『東北教区成立１００年の歩み』『東日本大震災　震災証言集』『せみなりお青葉　シリーズ』等、この10年間に刊行された冊子やパンフレット類を展示し、「ささげる、開く」の実践の実りを紹介いたしました。

他のブースでも記念誌や動画、パネルの展示等工夫を凝らして〝10年間の実り〟が紹介されていました。各教区の宣教活動の様子や日本聖公会全体で現在進行中の取り組みを知ることができ、出会いと発見に溢れた時間となりました。

夕食後、『私たちのあゆみ～物語を聴く』と題し、定住牧師がおらず信徒の少ない、所謂「小さな教会」の話を聴くプログラムがありました。

屋我地（やがじ）聖ルカ教会（沖縄）、厳原（いつはら）聖ヨハネ教会（九州）、大館聖パウロ教会（東北）の信徒の方々がそれぞれ、教会の歴史、地域や幼稚園との繋がり、教会生活の喜びと課題等をお話しくださいました。いずれの教会も、信徒数が少ないからこそ一人一人が「自分ができることをやる」という意識を持ち、課題を共有しながら喜びをもって教会を支えておられました。３教会の物語を聴き、神様がいつも共にいてくださる恵みに感謝し大いに励まされました。

最後に開会礼拝が行われ、出会いと恵みに満ちた一日目を終えました。

（仙台基督教会　マーガレット　若生　伸子）

～2日目～

２日目は、今回の宣教協議会のテーマである「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」についての説明や、大会の趣旨説明がなされました。その後５人の語り手の方から、それぞれ「子ども、キリスト教保育」「性の多様性」「カルト、人権」「傾聴ということ、スピリチュアルケア」「貧困」というテーマでお話を聴き、それぞれのテーマに分かれて分科会が行われました。

私はチャプレンとして幼稚園に関わることもあることから、「子ども、キリスト教保育」の分科会に参加しました。そこでは現代社会が求めがちな画一的な「良い子」を作るための保育と、あくまでも一人の人間として子どもたちを尊重し、自然や他者との関わりの中で「愛し愛される子」として育むことを目指すキリスト教保育の在り方の間で苦闘する現場の人の声や、その上で希望と喜びをもって子どもたちと向き合っているという声を聴き合うことが出来ました。

夕方からは６人ほどのグループに分かれてグループシェアリングを行いました。私が参加したグループでは、前日の３つの教会の話やこの日の分科会等を振り返ることから始まり、２日間で感じたことや、日本聖公会としての未来について思っていることを率直にシェアリングしました。

この日の最後にはバイブルシェアリングも行われ、ルカとヨハネ福音書からそれぞれ「隣人」について思いを馳せながら聖書を読み解き、終わりに青年たち主体で作られた「分かち合いの礼拝」を献げて、就寝となりました。一日を最大限に活用するスケジュールで、多少疲れもしたものの、とても刺激を受ける一日となりました。

（司祭　パウロ　渡部　拓）

～3日目～

３日目は入江修主教の司式と笹森田鶴主教の説教による聖餐式から始まりました。全国の方と祈りを共にする礼拝に感動し、多様性の中での聖公会の一致を感じました。

聖餐式後、主教会メッセー

ジがありました。１９７２年に11の教区になり、現在は教会数３０５、現在堅信受領者数は１１７８４人で、30年から40年の間に半減しているようです。２０２０年に宣教協働区、伝道教区制が総会で承認されましたが、信徒・聖職の間でもまだ認識の差があるようでした。東北教区と北海道教区ではチーム北国として交わりの時を持ち、それぞれの違いを洗い出してきていますが、長谷川主教は被災地での経験から出会っている人がすでに「となりびと」になっていた話をし、笹森主教は国土が全国の40％にもなる北海道教区と東北教区で課題も多いが、そこにこそ「福音」が必要と話されていました。東京教区と北関東教区は北関東教区が伝道教区となる決断をし、２０２５年に新教区となる歩みを始めているようです。日本聖公会は今、教区再編という大きな転換期にあることを実感しました。

その後宣教協働区アワーということで北海道教区の方と昼食を共にしながら教区の現状を雑談形式で話し合いました。北海道教区の大友宣さんのアイディアで赤い糸で繋がれた紐でグループ分けをしましたが、北海道教区の方を非常に身近に感じ、運命を感じました。

グループシェアリングでは教区・年齢・性別・立場を超えて教会の現状の話し合いをし、忌憚のない意見交換ができたと思います。

そして、「セーフチャーチ」をテーマにした夕の祈りでは、ロウソクの明かりの中、ギターとリコーダーの伴奏で聖歌を歌い、創世記とＮＣＣ制作式文による反創世記の朗読を聴きながら、いのちについて思いを巡らせました。

（盛岡聖公会　アタナシオ　曽根　勇司）

2023年 日本聖公会宣教協議会 ぶどうの枝だより⑪ 最終号

11月10日(金)～13日(月)までの日程で、清泉寮にて、２０２３年日本聖公会宣教協議会が開催されました。各教区から、また管区諸委員会から信徒と聖職１３２名が集まり、「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」をテーマとしてプログラムを持ちました。

「実り持ち寄りブースの紹介」。このプログラムでは、前回の宣教協議会から現在までの各教区や管区諸委員会の働きにおいてどのような実りがあったのか、また現在の課題は何かをブースの展示を通して分かち合いました。

「私たちのあゆみ～物語を聴く」。３つの教会の信徒の皆さんのお話をお聴きしました。３つの教会は信徒数の少ない教会ですが、それぞれの教会で豊かな信仰生活が営まれていることが分かち合われました。

「いのちの現場から聴く」。５人の語り手の皆さんから、「となりびと」と出会い（あるいは当事者として仲間とともに歩み始め）、今も一緒に歩み続けている物語をお聴きしました。

「主教会からのメッセージ」「宣教協働区アワー」。武藤謙一首座主教から、宣教協働区・伝道教区制導入の経緯についてお話がありました。また他の主教からは、「この世界の中で『となりびと』となるために大切にしたいこと」、「この世界における宣教・牧会で大切にしたいこと」、「宣教協働・教区再編において大切にしたいこと」というテーマでお話がありました。その後、各宣教協働区グループに分かれて交わりの時を過ごしました。

２回にわたる「グループシェアリング」では、小グループに分かれ、前半は、それまでのプログラムの感想を述べ合い、後半は、最終日の「宣教協議会からの呼びかけ」作成に向け、「私たちが、神様の招きに対して応答できなかったことは何か」「私たちは、招きにどう応えていくか」が話し合われました。

最終日に、ドラフトコミッティメンバーによる「呼びかけ」案をもとに意見交換が行われましたが、時間内では収まらず、その場で最終的なかたちにまとめることは難しいとの結論となりました。「呼びかけ」はドラフトコミッティのメンバーが改めて案を作り、参加者の合意のもとに正式なものとして出される予定です。

宣教協議会の録画映像は、「日本聖公会宣教協議会ブログ」から現在でも視聴可能です。ぜひご覧ください。

（文責：司祭　北澤　洋）

↑
宣教協議会スタッフブログはこちらから

奉仕職養成グループ主催研修会
「奉仕のススメpart６」開催

昨年の12月２日に「奉仕のススメ　part６」が開催されました。

奉仕職養成グループでも北海道教区との協働を進めるために関係部署との協議を始めており、前回の「奉仕のススメ」には笹森田鶴主教と上平更司祭がご参加くださいました。そのこともあって、今回は東北教区にはまだいない女性の聖職者の方からお話を伺うのはどうだろうか、という案が出されました。既にほとんどの教区では女性聖職者の方が奉職されていますので、お話をお願いする方たちにも特に女性聖職をテーマに指定するのではなく、自己紹介のような形で、ひとりの聖職者として、これまでの過程をお話しくださるようお願いいたしました。

今回お話を引き受けていただきましたのは三浦千晴執事、木村夕子司祭、阿部恵子司祭の３名の方たちでした。

テレビから流れてくる公共コマーシャルのひとつに「わたしは将来パイロットになりたい」などいくつかの希望や状況が語られた後に「あなたは今の声に男性、女性どちらをイメージしましたか。」ということを投げかけてくるものがあります。要するにあなたも固定観念に縛られていませんかと問いかけているものかと思いますが、私は今回３人の方からお話を伺ってそのことを思い浮かべました。

日本聖公会でも女性の聖職者は増えてきていますが、まだ女性であるがゆえに負わされる苦悩や試練、木村司祭のお話にあったような、初めて女性の牧師を迎える信徒の戸惑いなどのほかにも、受け入れ合っていくべき課題があることは事実です。しかし今回お話しくださった皆さんが語ってくださった聖職としての召命を感じた経緯、それを支えてくださった人たちとの出会い、様々なことに迷いながら決心していく様は、まるで自分自身に、また同労者たちに起こったことを反芻するかのように心に響いてきました。そこには女性も男性もありませんでした。ただ思いもよらぬ神からの召しと、それに答えていく人、支え応援していく人の姿があるのみだったのです。東北教区にも聖職としての奉仕に招かれながら迷っておられる方があるかもしれません。ぜひ牧師、奉仕職養成グループに相談いただけましたら幸いです。

今回の概要は奉仕職養成グループの不定期刊行物として教区の皆様にお届けする予定です。是非お手に取りご覧くださいますようお願いいたします。

（奉仕職養成グループ　司祭　涌井　康福）

東北教区
アイリーン　坂水　かよ

「チーム北国」の活動では、３月の本格始動から12月までに10回のミーティングが持たれました。

11月開催の両教区の「教区会」には、二つの議案を提出、一つは「チーム北国の拡大・期間延長・名称変更の件」、もう一つは「東北教区・北海道教区宣教協働・教区再編に向けてのミッションステートメントを採択する件」です。審議の結果、両教区とも二つの議案が承認され、これにより両教区は同じ目的に向かって、さらに歩みを進めていくことになりました。

今回の教区会では両教区内の教会・信徒代議員の方々との出会いの場として、オンラインで繋ぐ「北国セッション《おばんです》」が企画されました。各教会代議員の紹介コメント（持ち時間30秒）にかける意気込みに、終始会場は笑いに包まれていました。

今後の活動については、１月にコアメンバーと４セッションメンバーとの全体ミーティング（オンライン会議）を行い、目的等を理解・共有した上でそれぞれの活動がスタートする予定です。

この間の協働に関わる動きとして、東北教区「拡大展望会議」（10月８～９日）に北海道教区から大友宣さんが参加。新年１月執行機関合同会議に吉野暁生司祭が参加される予定です。12月２日東北教区「奉仕のススメ」（オンライン研修会）でも北海道教区の三浦千晴執事、木村夕子司祭、阿部恵子司祭のお話をお聴きするなど、交流も活発になってきました。宣教協働の場がワクワクする「楽しい出会いと交流の場」として広がり深まっていくようにと願っています。

洗礼・堅信式

2023年11月26日
仙台基督教会

（中央左冨山さん、右三浦さん）

「洗礼と堅信を受けて」

ヨハネ　三浦　智弘

２０２３年のアドヴェント前の最後の主日、教会暦の上で１年の終わりの日にあたる11月26日に入信の式の恵みに与りました。八木正言司祭様より洗礼を、長谷川清純主教様より堅信を受けました。金友高史さん、みや子さんご夫妻と大槻悦夫さんには教父母の労をとっていただきました。また、多くの信徒の皆様に祝福をしていただき、心から深く感謝申し上げる次第です。

高校の英語教師をする傍ら、学生時代の学びの延長として16世紀英国教会説教集の翻訳に取り組んでいるなかで、アングリカンの教会の礼拝に出てみようと思うに至りました。仙台基督教会に初めて足を踏み入れましたのは２０２３年２月のはじめで、それからおよそ10か月、聖餐式やみ言葉の礼拝、そして聖書の学びの会である「迷羊会」に参加して参りました。当初は洗礼を受けることについて積極的ではなかったものの、司祭様をはじめ多くの方々との交わりを通し、ただ学問というのではなく自身の生き方に照らして信仰を持つことの大切さに思いを致すようになり、洗礼を受けようと心を決めました。

母の胎を出た日とはまた別に、11月26日を自身の第二の誕生日と心得て、聖書にありますように、いったん鋤に手をかけたからにはもはや後ろを振り返ることなく、皆様とともに、光の中を、光に向かって一路に歩んで参りたいと思う所存です。今後とも幾久しく交わりを持たせていただきますようお願い申し上げます。

「神様へ導かれて」

グレース　冨山　のぶ子

11月の誕生月に長谷川主教、八木司祭、教父母の方々のもと洗礼・堅信を受けることができましたことを心から感謝いたします。私はミッションスクールに通っておりましたが、それはただの通過点に過ぎませんでした。

２０２１年春、妹の突然の余命宣告、そして死。明日の命は誰もわからない、死ぬって何だろう。生と死は密接につながっている。死ぬとは即ち生きること。この様な思いを友人である信徒の田中巧子さんに話したことが、私が教会に通うきっかけになりました。

教会の皆さんは、偉ぶらず優しく真摯な姿に学ぶことは多く、素晴らしい人たちと出会い親しく接することができました。そのようにできるのも神様のお導きと思い楽しく教会に通っているうちに、洗礼・堅信のお話をいただきました。

キリスト教者としてやっていけるのかと不安で望んだ洗礼・堅信の日、八木司祭様の手の温もりによってその不安は取り除かれました。長谷川主教様よりいただいたお話は、弱い立場の人に寄り添うような語尾のイントネーションが味わい深く、その優しいお声は胸に直接ひびき、言葉に言い表せない感動で涙あふれそうな思いでした。

「あなたの隣人を自分のように愛しなさい」この言葉を心にきざみながら、神様が共にいてくれることを思いおこし祈りつづけていきたいと思います。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

今号は誌面の都合により、「北から南から」はお休みいたします。

北海道教区　教会紹介

札幌聖ミカエル教会

１９５１年５月、上田一良主教の宣教計画に基づき札幌北部在住の信徒、特に青年を主体に「ミカエル伝道奉仕団」を結成し路傍伝道開始、労働奉仕で９月仮聖堂を建設した。Ｂ・Ｄ・タッカー司祭の時期に幼稚園や青年寮、ＧＦＳなどの活動で地域奉仕の礎が築かれた。１９６０年Ａ・レーモンド師設計、竹中工務店施工で現礼拝堂が完成し２００８年札幌市都市景観賞に輝く。

併設のＨＩＲＯＢＡを活用して海外支援や社会奉仕に目を向け「あかるく元気・しゃかいに開かれ・たねまくミカエル」を掲げ現在進行形で歩み中。

西の平聖パウロミッション 閉所にあたり

仙台基督教会　マルタ　目黒　かおり

11月25日に長谷川主教様、加藤主教様を始めとする聖職の方々と共に、40名の参加者が集い、閉所礼拝を捧げました。懐かしい顔が集まり、いつも通り美しいオルガンの音が流れ、これまでの歴史に思いをはせながらの温かで、厳かな礼拝となりました。礼拝に引き続き、聖別解除の祈りが行われ、67年間の伝道所としての使命を終えました。当伝道所は、多くの子どもたちが集まった家庭集会に始まり、聖テモテ館の完成、聖書勉強会、ボーイスカウトの活動、ぶどうの会（手仕事会）、屋根の修復、老朽化に伴う牧師館の取り壊し、炎天下の中で延々と続く草刈り、東日本大震災での被災、たくさんの大先輩の信徒の方々を見送ったこと等々、盛衰の思い出がたくさん詰まった伝道所でした。シロアリが発生した旧礼拝所から、力を合わせて聖テモテ館に礼拝の場を移したことも、昨日のことのように思い出されます。私たちが毎週礼拝を行ってきた聖パウロミッションは、小さく古くても、そこには確かに神様がおられ、静かな祈りの場であったと思います。長い伝道所としての歩みをこれまで支えてくださった歴代の主教様、司祭様、執事様、環境整備を手伝ってくださった仙台基督教会の皆様、聖ルカ幼稚園の先生方と子どもたち、地域の方々に、信徒一同、感謝の気持ちが絶えません。ありがとうございました。

閉所礼拝後、西の平の信徒は、仙台基督教会での信仰生活をまた新たな気持ちでスタートいたしました。仙台基督教会の皆様、どうぞよろしくお願いします。

東日本大震災被災者支援プロジェクト報告

12月13日の水曜喫茶は、いつもの参加者に久しぶりの地元の方、大阪、名古屋、山梨からの参加者も加わり、総勢19名の開催となりました。いまや名物となった抹茶の嗜みと各地からの差し入れの他、「新地産」みかんやお土産も戴きました。なつかしく、盛り上がった会となりました。

感謝！

常置委員会報告（第2回・12月20日）

報告事項▼常置委員長報告：第108(定期)教区会に常置委員会から提出した報告および議案の全てが承認・可決されたことを報告。

協議事項▼2024年度信徒奉事者（分餐奉仕協力許可）推挙について、7教会41名を適当と認め推挙。▼大韓聖公会大田教区金鎬旭主教就任お祝い金拠出について承認。▼「教区事務所職員給与規程」「教区事務所職員就業規則」の改正について承認。▼第108(定期)教区会期の教区諸委員選任について、

総　主　事：八木正言 司祭
総務主事：浅原和裕 氏
教育主事：中村久美子 氏
宣教主事：村上道夫 氏
財政主事：赤坂有司 氏

を選任。その他各グループ・部門長及びメンバーについても、各主事等からの推挙を基に検討し委嘱することを承認。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

2月4日は「ハンセン病問題啓発の日」です。ハンセン病問題により苦しめられた方々を覚え、理解が深まるようお祈りください。

洗礼おめでとう

プリスキラ　菊田　直未
マルタ　菊田　小望未
ベタニヤのマリア　菊田　小愛華
（12月25日・青森）

堅信おめでとう

プリスキラ　菊田　直未
（12月25日・青森）

永遠の平安

マリア　柳原　マツエ
（2023年3月16日・松丘）
プリスカ　木村　朝代
（12月13日・松丘）
マーガレット　千葉　夏代
（1月5日・松丘）

2月逝去者記念聖餐式

2月21日(水)　午前10時～　於　主教座聖堂
司式・説教　長谷川清純　主教

伝道師　横田　秋生
1923年2月4日逝去
宣教師　Miss Berta R. Babcock
1943年2月4日逝去
執事　戸所　芳一
1971年2月7日逝去
主教　ダビデ谷　昌二
2022年2月9日逝去
主教　Norman Spencer Binsted
1961年2月20日逝去
伝道師　桑野　文子
1941年2月22日逝去
主教　Shirley Hall Nichols
1964年2月25日逝去